



少なくなってしまった茅葺屋根などがあると多く見られる、ホソセイボウ。セイボウは漢字で「青蜂」



セイボウらしい胸部のメタリックグリーンと、腹部の赤色の組み合わせが美しいハラアカマルセイボウ

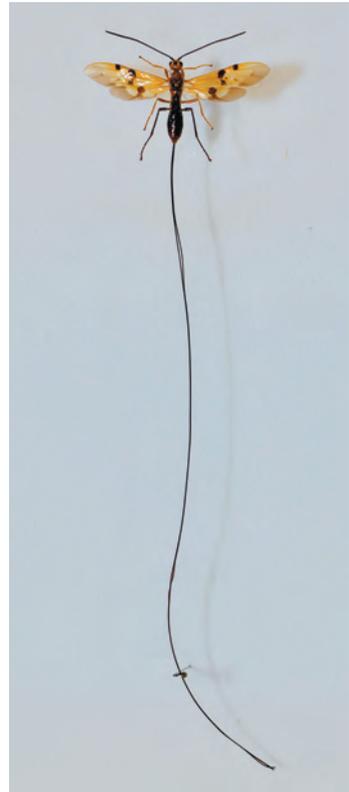
可憐！黄色と黒だけではない美しいハチの世界



瑠璃色の紋様が美しいリリモンハナバチ。ハナバチだが、巣を作ったり花粉を集めたりすることはない。英語では Blue Bee ではなく Neon cuckoo bee



南米に生息する美しいシタバチの一種。とにかく舌が長い。ミツバチに近い仲間



とにかく長い尾=産卵管を持つウマノオバチ。飛翔時に揺れる尾はとても優雅

これでもハチ？変わった姿のハチたち



飛んでいる姿は黒いヒモのようにしか見えないオオコンボウヤセバチ



ハチのイメージそのまま。尖ったお尻のオオトガリハナバチ



大きな複眼でハエやアブのように見えるオオハヤバチ



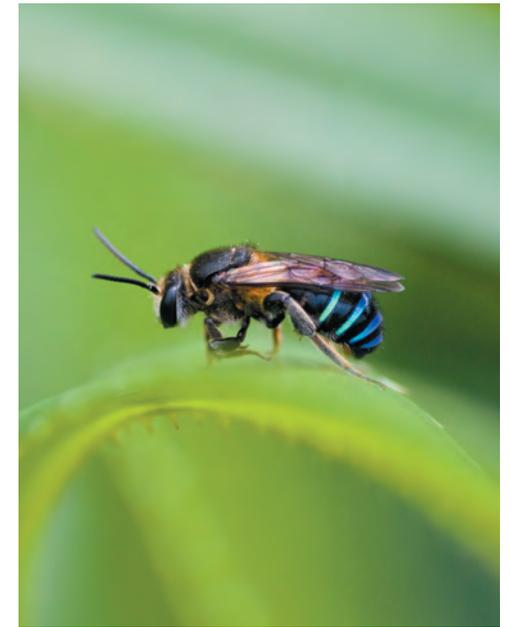
メスは翅がなく、地表を歩いている姿は、どこからどう見てもアリにしか見えないトゲムネアリバチ



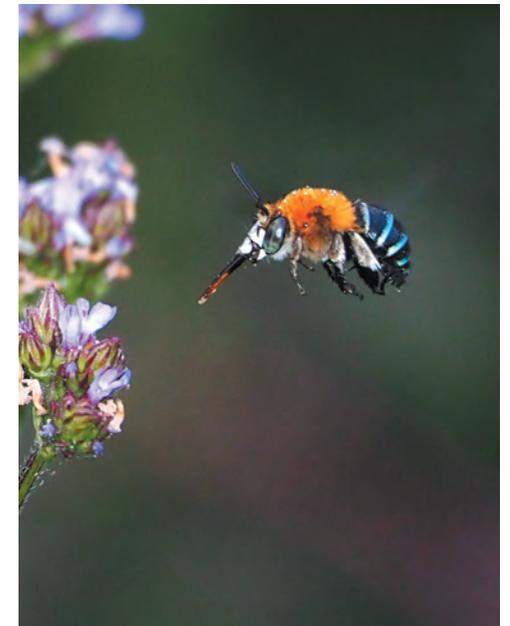
赤というよりは鮮やかな朱色の腹部が目立つ、その名もハラアカヤドリハキリバチ



オレンジ色が美しいトラマルハナバチ。山間地にはレモン色が美しい近縁のウスリーマルハナバチがいる



奄美大島以南の南の島に分布するミナミアオスジハナバチ。近縁のアオスジハナバチは本州にも分布



眠る時は集団で寝る変わった習性を持つ胸部のオレンジと腹部の青い線が美しいアオスジフトハナバチ

嫌な臭いで寄せつけません アシナガバチ

カリバチ

スズメバチ科

アシナガバチ亜科

私たちにとって怖い存在。かつ、昆虫界の頂点に立っているようなイメージの、アシナガバチやスズメバチ。そんな彼らにも、厄介な相手があります。それは、アリです。集団で生活し、半年間にも及ぶ長い期間に渡って多くの卵、幼虫、蛹が育てられているアシナガバチの巣は、アリなどの天敵から見ると、常にたくさんの餌が用意されている格好の餌場と言っても過言ではありません。隙あらば、巣から幼虫などを奪い取ろうと、虎視眈々と巣の周りをウロウロしています。そんな天敵から幼虫たちを守るため、アシナガバチの巣にはある工夫が施されています。アシナガバチの巣をよく観察してみると、巣柄^{すえ}と呼ばれる1本の支柱でぶら下がっていることがわかります。この構造が、巣に侵入するためのルートを一か所に限定し、天敵の侵入から巣を守りやすくしているのです。次に、巣柄から

巣の本体がつながっている部分、つまり巣柄の根元付近を見てください。黒っぽく、テカテカ、ツヤツヤしていることがわかります。これは、アシナガバチが腹部から分泌する物質を塗りつけたものです。この物質こそが、アリが嫌う、アリを忌避するための重要な秘密兵器なのです。同様の工夫は、スズメバチの作り始めの巣でも見ることができます。またカリバチだけでなく、社会性の生活を営むハナバチの仲間でも、よく似たアリ避けの対策が知られています。ハリナシバチが巣の材料として利用するヤニ(樹脂)や、セイヨウミツバチの巣から集められ、健康食品として珍重されるプロポリスも、同じくアリ避けの効果があると考えられています。集団で生活し、堅牢な巣を作ることので、天敵からの防御は容易なように思えますが、実は様々な工夫が施されているのです。



束ねた筒は集合団地 マメコバチ



青森県や長野県などのリンゴで有名な産地に行くと、果樹園の中に犬小屋のようなものが設置されているのを目にします。私たちがリンゴ狩りに行く時、その中身は空っぽで何も入っていません。しかし、真っ白なリンゴの花があたり一面を埋め尽くす頃になると、その小屋の中に束ねられた葦や竹筒が収められます。その束ねた筒のあたりでは、体長1cm程度の黒いハチがせわしなく飛び回っています。よく見ると、お腹の下に貯めたリンゴの花粉を筒に運び込んだり、幼虫が育つ部屋の間仕切りになるド口を口にくわえて運び込

ハナバチ

ハキリバチ科

ツツハナバチ属



んだりしています。このハチの名は、マメコバチ。リンゴやサクランボの受粉に利用される野生のハナバチで、細い筒の中で巣作りをします。リンゴの栽培農家さんでは、家や作業小屋の軒先に束ねた筒をいくつもぶら下げて、マメコバチに入居してもらっています。さながら、その様子はマメコバチ団地と言ってよいかもしれません。古くから宿場町として栄え、今も観光地として有名な福島県、大内宿の茅葺屋根の軒先にも、北会津リンゴ研究会という農家さんたちのグループのマメコバチ団地がたくさんぶら下がっています。説明用に看板なども掲示されていますので、この場所を訪ねることがあったら、名物のお蕎麦やお団子に心奪われるだけでなく、ぜひマメコバチ団地もご覧になってみてください。

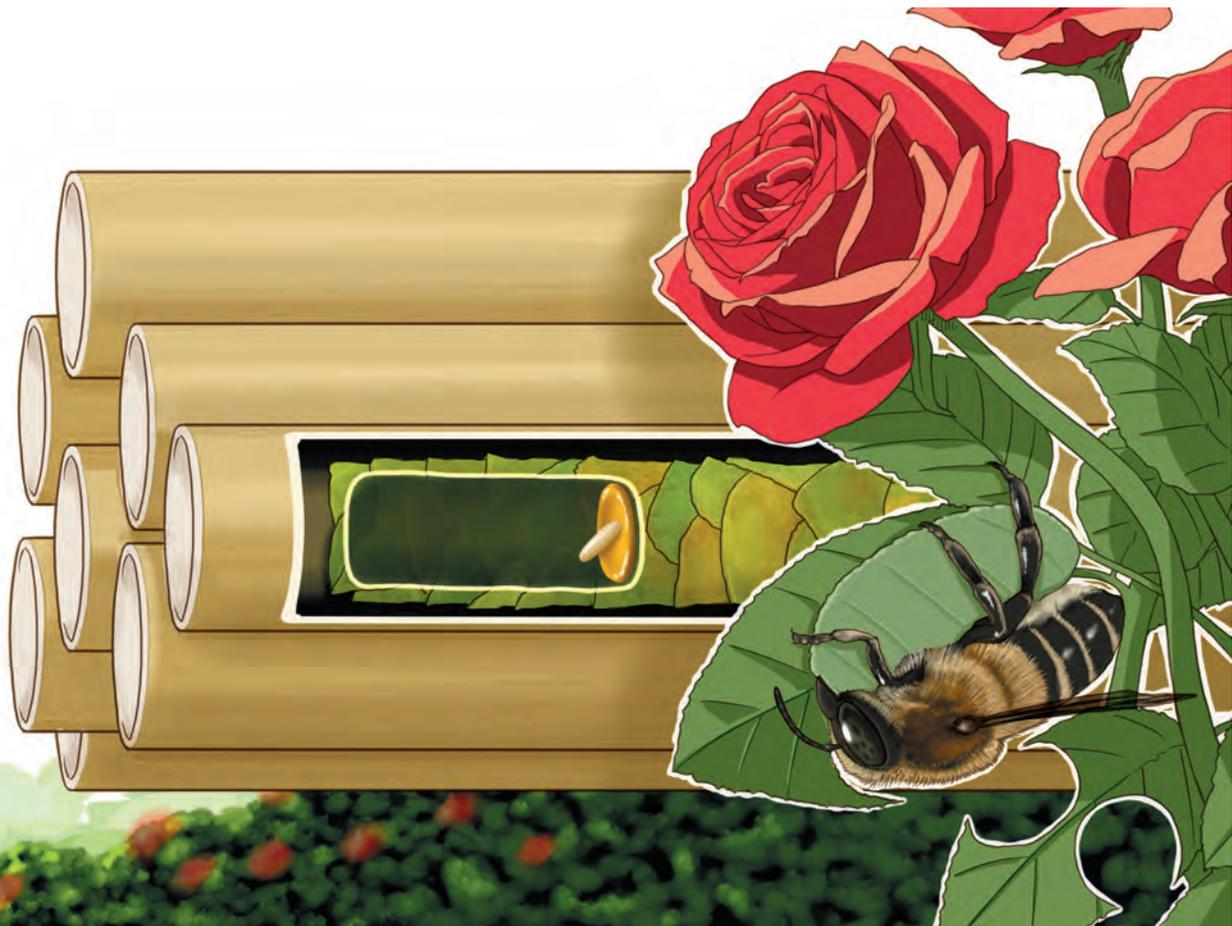
有名なのはアリだけど… ハチの世界にもいる ハキリバチ

ハナバチ

ハキリバチ科

ハキリバチ属

切り取った葉のかげらを、列をなしたアリがくわえて運ぶ姿が、ヨットの帆にも例えられるハキリアリ。その光景は、テレビなどの映像でもよく目にします。ハキリアリは葉を巣に持ち帰り、餌となるキノコを栽培するために利用することで有名です。実はハチの中にも、葉を切り取って巣に持ち帰るものがあります。それが、ハキリバチの仲間です。とはいえ、ハキリバチが持ち帰る葉は餌にしたり、キノコの栽培に使われるわけではありません。竹や葦のような筒、または土の中の空洞に作られる巣の材料として利用します。ハナバ



葉を切り取って巣に持ち帰る
バラハキリバチ

チの一種であるハキリバチは、花から集めた花粉と蜜を混ぜ合わせた花粉ケーキを幼虫の餌にします。この花粉ケーキで満たされた部屋に、1つずつ卵を産みつけます。そしてこの部屋を作る際に、葉が利用されるのです。ハキリバチは、円や楕円に切り取った葉を丁寧に組み合わせ、部屋を作ります。一方、ハキリバチが切り取ったあとの葉には、綺麗な切り跡が残ります。この切り跡を、ガなどの幼虫が葉っぱを食べた跡と勘違いする人も多いようです。でも今度、バラの葉っぱなどに綺麗な円や楕円状に切り取られた跡を見つけたら、ハキリバチの仕業ではないかと疑ってみてください。観察していると、近くで一瞬懸命葉っぱを切り取っているハキリバチに出会えるかもしれません。

旅は道連れ、風まかせ カマバチ

カリバチ

カマバチ科

カマバチ亜科など

ハチの中でもっとも種数の多い寄生バチは、幼虫が他の昆虫の体を餌として成長します。寄生バチに寄生される昆虫を、「宿主（しゅくしゅ）」とか「寄主（きしゅ）」と呼びます。寄生バチの寄主への寄生方法は、大きく2つあります。1つは、寄生バチの幼虫が寄主の体の中で育つ「内部寄生」。もう1つは、寄主の体の一部に張りついて育つ「外部寄生」です。今回の主役、カマバチの幼虫は、外部寄生をするタイプの寄生バチです。カマバチの寄主は、セミに近い仲間で、ウンカ、ヨコバイという昆虫です。セミと同様に植物から養分を吸って生活するため、ウンカの中には私たちの主食であるお米、つまり稲の栽培に大きな被害をもたらす種もいます。つまりカマバチは、害虫のウンカに寄生してくれる、ありがたいハチというわけです。カマバチという名前は、前肢あしにカマキリのようなカマ

を持つことからつけられました。カマバチのメスには翅がなく、歩きながら移動します。その様子は、まさに小さなカマキリのように。カマキリと同じく、前肢のカマでウンカを捕えます。カマキリと異なるのは、ウンカを食べるためではなく、産卵するために捕まえる点です。ウンカの体の外側に産みつけられた卵は、ふ化するとウンカのお腹の節や頭と胸のつなぎ目などにくっついて、ウンカの体液を吸いながら成長します。寄生されたウンカは、体にカマバチの幼虫をくっけたまま生活します。稲を食害するウンカは、中国大陸などから日本にまで風に乗って飛んでくることもあります。カマバチも、ウンカに寄生したまま一緒に風にゆられ、遠く海を渡ってくることもあるとか。でも、最終的に寄生されて殺されてしまう側のウンカにとっては、「旅は道連れ…」という気分ではないですよ。

産卵のためにヨコバイを捕らえる
カマバチ

ヨコバイに寄生する
カマバチの幼虫

紙の作り方教ええます！ アシナガバチ、スズメバチ

カリバチ

スズメバチ科

突然ですが、皆さんは人類の「三大発明」をご存知でしょうか？ ロケット？ パソコン？ スマートフォン？ いえいえ。それは、火薬、羅針盤、活版印刷だそうです。急速にデジタル化が進んだ今日では今1つピンと来ないかもしれませんが…。それはさておき、活版印刷には紙の存在が欠かせません。紙の発明があつてこそその印刷技術です。さて、ここからが本題です。その紙の作り方を人類に教えたのは、実はハチだと言われていることをご存知でしたか？ 紙は、紀元前150年ごろに中国で発明されたものが最古のものだとされています。紙の定義は「植物などの繊維を絡ませながら糊のような固着剤などを利用して薄く平たく成形したもの。」(ウィキペディアより) だそうです。そしてこの定義とほぼ同じようなことを、アシナガバチは人が紙を作り始めるずっと以前

から行ってきました。アシナガバチは、植物の枝や葉に生えている毛や、木のけば立った部分を齧り取り、噛み砕きながら、特殊な成分を含んだ唾液と混ぜ合わせて巣の材料にします。アシナガバチの巣を透かして見ると、紙と同じように細かい繊維状のものが複雑に絡み合つて形成されていることがわかります。このアシナガバチの巣作りをヒントにして、紙が作られたと考えられているのです。加えて、近代においてもスズメバチが木材を噛み砕いて巣の材料にしていることを観察して、木材から紙を作ることができるという論文を1719年にフランス人学者のルネ・レオミュールが残しています。つまり、現在の木材パルプから紙を作る方法はスズメバチから学んだというわけです。時を超え、2種類のカリバチから学んだ紙作り。ハチつて、本当に偉大です。

木材から紙を作ることは
アシナガバチから学んだ？



究極のヒモ生活？ ミツバチのオス

ハナバチ

ミツバチ科

ミツバチ属

働きバチから口移しでハチミツを
もらうミツバチのオス



交尾の期間が終わると巣から
追い出されるミツバチのオス



ミツバチの働きバチはすべてメスである、ということをご存知の読者も多いのではないかと思います。それでは、ミツバチのオスは？ ミツバチのオスは、メスの働きバチとは似ても似つかない、ハエやアブのような容姿をしています。そんなミツバチは見たことない、という人もいるかもしれませんが、それもそのはず。ミツバチのオスは、働きバチのように花を訪れることはありません。羽化してきます。そして、空中にある交尾場所に集まっては交尾に挑み、失敗すると巣に帰るといいう日々を

送っています。口が退化して花から自分で蜜を飲むこともできないので、生きている間は、巣の中で働きバチに口移しでハチミツをもらって生活しています。ですから、私たちが花の上でミツバチのオスを見かけることはありません。巣と交尾場所の往復生活を送るミツバチのオスに、私たちが出会わないのは当然なのです。交尾ができずに巣の中でウロウロしている。役立たず。のオスたちは、春の交尾の期間が終わると働きバチから蜜をもらえなくなります。いくらねだっても、働きバチは蜜をくれません。拳句には、巣から追い出されるようになります。ついには、オスバチの餓死した亡骸が巣の前に黒山のように…。ミツバチのオスたちの悲しい性。究極のヒモ生活が終わりを告げた証です。

それでも交尾は命がけ ミツバチのオス



ミツバチのオスは、交尾をするためだけに生まれてきます。ミツバチは、DCA（ドローン・コングリゲーション・エリア）と呼ばれる、空中の決まった空間で交尾をします。近隣にあるミツバチの巣からたくさんのおスバチが集まって、新しく生まれた女王バチがDCAに来てくれるのを待ちます。ミツバチの女王バチは、生涯に何千、何万という働きバチを産むために、たくさんのおスバチと交尾をします。これを多回交尾と言います。その回数は、おおよそ14〜20回程度と言われています。ただし、同じオスと何回も交尾をす

るのではなく、すべて別々のオスと交尾をします。そして、おスバチの方は1回しか交尾しません。というよりも「できない」と言うべきです。なぜなら、ミツバチのオスは女王バチと交尾をすると、交尾器のあるおなかの末端を残して、自切してしまふからです。トカゲの尻尾が切れるようなイメージですが、トカゲの尻尾とちがって、目的は本体を生かすことではありません。むしろ重要なのは、交尾器ごと残してきたお尻の方にあります。女王バチに交尾器をつけたままにすることで、他のオスとの交尾を邪魔する目的があるのではないかと言われています。一方、お尻が切れた本体は地面に墜落して、その短い生涯を閉じます。交尾が命がけとは、同じオスの私としてはなんと複雑なお話です。

ハナバチ

ミツバチ科

ミツバチ属

テントウムシを手玉にとる テントウハラボソコマユバチ

寄生バチ

コマユバチ科

ハラボソコマユバチ亜科

コレマンアブラバチ(70ページ)のような寄生バチが寄生するのは、私たち人間が「害虫」と忌み嫌う昆虫ばかりではありません。寄生バチの寄生対象は多様で、寄生に関する生態もまた様々です。テントウムシに寄生するテントウハラボソコマユバチも、寄生に関する非常に面白い習性を持ったハチです。他の寄生バチと同様、コマユバチは寄生相手(寄主)であるテントウムシに近づくと、腹部を曲げてテントウムシの脇腹に卵を産みつけます。その時コマユバチは、針を使ってテントウムシに麻酔を打ち込みます。つまり、テントウムシの動きを封じてから卵を産みつけているというわけです。ふ化したコマユバチの幼虫は動けなくなつたテントウムシの体内に入り込み、テントウムシの体液や脂肪などの組織を食べて成長します。テントウムシの体の2分の1ほどの大きさに成長したコマユバチ

の幼虫は、テントウムシの体から這い出して、テントウムシの体の下で蛹になります。コマユバチの蛹の上に硬い上翅を持つテントウムシが覆いかぶさつて、蛹を守っているような状態になるのです。なんとテントウムシはこの状態でもまだ生きていて、外敵などを追っ払うように脚をバタつかせることができるそうです。テントウムシはコマユバチの幼虫に手玉にとられ、操られているとしか思えません。この不思議なくみは、コマユバチが麻酔成分と同時にテントウムシの脳を操るウイルスを打ち込んでいることを発見した2015年の論文で明らかになりました。しかも、コマユバチが蛹から羽化したあと、寄生されたテントウムシの25%ほどはもとの生活に戻り、再度コマユバチに寄生されるものまでいるそうです。テントウムシの身になってみると、なんとも気の毒なお話です。

テントウムシに卵を産みつける

テントウハラボソコマユバチ



コマユバチの幼虫はテントウムシの体の下で蛹になる

体の7倍以上の長さの尾を持つ ウマノオバチ

寄生バチ

コマユバチ科

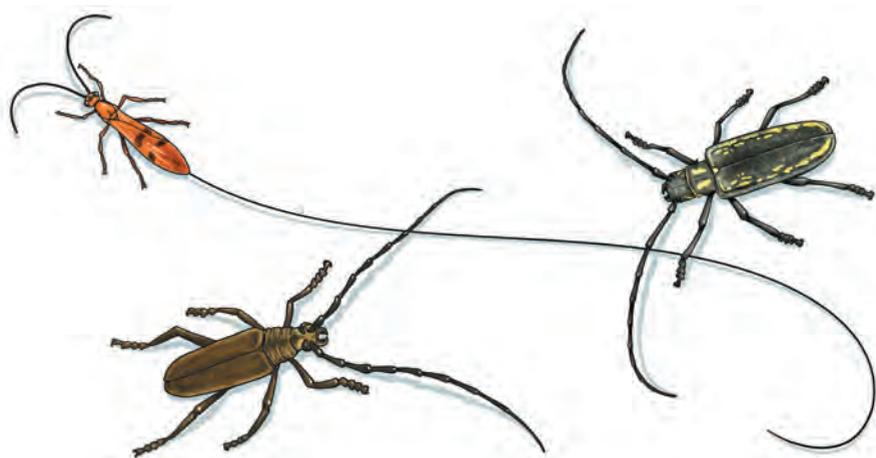
コマユバチ亜科

ウマノオバチは長〜い尾を使って
カミキリムシの幼虫に卵を産みつける



ウマノオバチ。漢字で「馬尾蜂」と書きます。ふさふさの馬の尻尾全体ではなく、尻尾を構成する1本1本の長い毛のような尾を持つハチということ、この和名がつけられました。体長1.5〜2.5cm程度のハチの腹部の先端から、馬の尾の毛が長く伸びているように見えるハチ、といえばその姿を想像できるでしょうか？ あまりにも特徴的なその姿は、子供向けの昆虫図鑑などでも必ずと言ってよいほど紹介されるので、ミツバチやスズメバチなどハチの代名詞と言えるハチに次いで有名なハチかもしれません。さて、体長の7〜9倍もあると言われる長い尾のように見える部分は、実は尾ではなく産卵管です。ウマノオバチは寄生バチの仲間、寄生対象となる他の昆虫（寄主）の体の中あるいは外側

に卵を産みつけ、幼虫は寄主の体を餌とすることで成長します。ウマノオバチが寄生する相手は、主にカミキリムシの幼虫と考えられています。カミキリムシの幼虫は木の幹の深い中心部で生活しているので、その相手に産卵しようと思うと、こんなにも長い産卵管が必要になったのではないかと、このままでは大型のカミキリムシであるシロスジカミキリが寄生相手と考えられてきました。近年、やはり体の大きなミヤマカミキリに寄生していることが確認されました。寄生相手が木の中の奥深いところにいるため、人間にはその証拠がつかみにくかったのです。それほど見つけづらいカミキリムシの幼虫を発見して産卵するのですから、驚くほど長い産卵管が必要であることは逆に納得ですね。



水の中を飛ぶように泳ぐ アメンボタマゴクロバチ



アメンボの卵に寄生するため水中を泳ぐ
アメンボタマゴクロバチ

ハチの翅は空を飛ぶためのもの？
いえいえ、そんな固定観念は捨ててください。鳥の世界に羽根を使って水中を泳ぐ海鳥がいるように、ハチの世界にもその翅を水の中を泳ぐことに使うものがいるのです。アメンボタマゴクロバチは、その名の通り水辺で生活するアメンボの卵に関係があるハチです。このハチは、本書の中でもたくさん出てくる寄生バチの一種で、その寄生する相手がアメンボの卵であることが名前の由来です。アメンボタマゴクロバチのメスは、水中の水草などに産みつけられているアメンボの卵まで、翅を使っ

寄生バチ

タマゴクロバチ科

Tiphodytes 属

て泳いでいきます。そして、アメンボの卵に自分の卵を産みつけます。翅の先端には多くの毛が生えているのですが、水をかいて泳ぐことに便利だったり、毛の間に空気を挟んで呼吸できるようにしているのではないかと考えられています。アメンボタマゴクロバチの幼虫は、アメンボの卵を栄養にしながらか成し、その中で蛹になります。やがてアメンボの卵の殻をやぶり成虫となって出てきたアメンボタマゴクロバチは、大空に舞い上がることはできません。その前に、自分が育ったアメンボの卵がある、水中からの脱出が必要なのです。そのためには、翅を使って水中を泳ぎ、水面を目指さなくてはなりません。大空を目指してまずは水の中を飛ばなければならぬとは、なかなかハードな生き方ですね。

無駄な抵抗はしません アシナガバチ vs スズメバチ

カリバチ

スズメバチ科

アシナガバチ亜科

ハチの中には、とても偏食なものがいます。人間の
場合、「偏食」というと栄養バランスが悪く体によ
くないイメージです。しかし偏食のハチは単なる好き嫌
いではなく、それだけを食べるために進化してきたの
です。そのように考えると、「専門食」という言い方
の方がよいかもれません。こうした専門食の習性を
持つハチが、ヒメスズメバチです。ヒメスズメバチは、
アシナガバチしか食べません。しかも、アシナガバチ
の幼虫や蛹、さらには幼虫や蛹の体液だけが食べな
いのです。ものすごい偏食：いや、専門つぶりです。
そのため、ヒメスズメバチがアシナガバチの成虫を捕
食することはありません。対するアシナガバチも、自
身が襲われることにはないとわかっているためか、ヒメ
スズメバチが幼虫を食す姿をただ眺めていることが多
く、ほとんど抵抗しません。とはいえ、ヒメスズメバ

チは執拗にその巣の幼虫や蛹を食べてしまうため、襲
われたアシナガバチはその巣を放棄して、引越して
しまうことが多いようです。一方、他の種のスズメバ
チがアシナガバチの巣を襲った場合は、また別です。
ヒメスズメバチ以外のスズメバチはアシナガバチの成
虫も襲って捕食するため、それはもうビックリするほ
どあっさりとした巣をあきらめてしまいます。どれくらい
あっさりかと言うと、スズメバチが襲来したとたん、
巣からアシナガバチの成虫がぼたぼたと音をたてて落
ちていくように見えるほど、巣から飛び去ってしまう
のです。100ページで紹介したように、アシナガバチ
よりも小さく、弱そうに思えるニホンミツバチでさえ
スズメバチに立ち向かってゆくの、まったく抵抗し
ないアシナガバチ。これも、昆虫の多様な生き残り戦
略ということでしょうか。

たいていの場合、ただ傍観するだけの
アシナガバチ



セグロアシナガバチの巣を襲って
幼虫を食べる
ヒメスズメバチ

まるでカッコウ？ オオトガリハナバチ



皆さんは、カッコウという鳥をご存知でしょうか？ カッコウは巣作りをせず、オオヨシキリなど他の鳥の巣に卵を産みつけ、他の鳥（家主）に自分のヒナを育てさせる「たくらん托卵」という習性を持つ鳥です。カッコウのヒナは、餌を独占できるように家主の卵よりも先にふ化して、家主の卵をすべて壊してしまいます。生まれたてのヒナがそんなことをするなんて…。実は、ハチの世界にも似たような習性を持つハチがいます。それが、オオトガリハナバチです。このハチは、家主であるオオハキリバチが作った巣に侵入し、家主よりも

先に卵を産みます。オオハキリバチの巣には花粉と蜜でできた花粉ケークが用意されていて、オオトガリハナバチはそのケークに忍ばせて卵を産みます。その後、オオハキリバチも卵を産みつけて、1つ屋根の下、2種類のハチの幼虫は同じ花粉ケークを食べて一緒に育ちます。ところが、オオトガリハナバチの幼虫が3齢幼虫になると、家主のオオハキリバチの幼虫を大きなアゴで噛み殺し、花粉ケークを独占して成長します。幼虫なのにそんなことするなんて…。まさにカッコウそのものです。このように自らは花粉を集めたり、巣を作ったりといった労働をいっさいせず、人様の巣に自分の卵を産みつけて知らん顔をする「労働寄生」という習性を持つハナバチのことを、カッコウビー^{*}と呼んでいます。

ハナバチ

ハキリバチ科

トガリハナバチ属

幸せを呼ぶ？青いハチ ルリモンハナバチ

ハナバチ

ミツバチ科

ルリモンハナバチ属

ハチの色は？と聞いて、皆さんが思い浮かべるのは黒と黄の縞模様でしょうか？黒色と黄色の縞模様は、一般的に警戒色として、私たち人間だけでなく、他の動物たちにも危険を知らせる効果があることが知られています。しかし多様なハチの世界には、私たちのハチに対するイメージを覆す色彩を持つハチがいます。ルリモンハナバチもその一つ。通称「ブルービー」というその名の通り、とても美しい瑠璃色の斑紋が体中にちりばめられています。見つけた人をラッキーな気分させるその姿から、昆虫好きの人には「幸せの青い鳥」ならぬ「幸せの青いハチ」として人気があります。ハチとしては珍しいその色彩から、時々ニュースなどで紹介されることもあります。ところが、人間にとっては幸運のハチでも、同じハチの仲間、一部のハナバチにとっては実はアンハッピーな存在なのです。

それは、このルリモンハナバチの体色ではなく、「労働寄生」という変わった習性にあります。通常ハナバチの多くは、土の中あるいは竹筒や木の洞などに作られた巣に、花から花を何度も行き来して集めてきた花粉を団子状あるいはケーキのように押し固めて保管します。そこに卵を産みつけ、幼虫は花粉を餌にして育ちます。しかし、ルリモンハナバチは花の蜜を自分のエネルギーとして飲むために花を訪れるだけで、花粉を集めたり、巣を作ったりするようにはまったくしません。土の中に作られた、まったく別種のスジボソトハナバチが苦労して集めた花粉団子に自分の卵を産みつけて、ちゃっかり幼虫を育ててもらい、あとは知らん顔。その美しい容姿とは裏腹に、その習性を知ってしまうとちよっぴりイメージダウンな奴です。



葉の上から
寄生のチャンスをうかがう
ルリモンハナバチ

土の中に巣を作る
スジボソトハナバチ

眠る時はみんなで整列 フトハナバチ

ハナバチ

ミツバチ科

フトハナバチ属

ハチの仲間には、ミツバチやスズメバチのように成虫が共同で多くの幼虫を育てる社会性の生活をするものと、個々に生活する単独性のものがあります。実は、社会性のハチは少数派で、ほとんどは単独性です。沖縄など南の島々に暮らすアオスジフトハナバチとミナミスジボソフトハナバチも、単独性のハナバチです。その名の通り少し太い…失礼、丸い体つきの、可愛らしいハチです。また、ある行動がこのハチの愛くるしさに輪をかけています。それは、葉や枝にアゴで噛みつき、6本の脚を折りたたんだ状態で宙ぶらりんになる行動です。ハチの仲間は、昆虫の中でも特にアゴが発達しています。そのアゴで昆虫を食べるものもいますが、餌を運ぶことや、巣作りのため木に穴を開けるといった、本来の目的とは異なる使い方をするハチも多く見られます。このハチの場合は、そのアゴを休息

のために利用しているようです。夜になると、彼らは斜面などから突き出て垂れ下がった細長い葉や枝にアゴで噛みつき、ぶら下がって眠ります。しかも、日中は単独で生活しているはずなのに、夜は集まって、お行儀よく1列にぶら下がって眠るのだそうです。ここで面白いのは、垂れ下がった葉や枝の先端から、早いもの順に止まっていく習性。このハチの行動を研究する筑波大学の横井智之博士によると、これは根元の方から忍び寄ってくる外敵に対して、先端にいる方がより優位だからではないかと考えられるそうです。また、メスはメスどうし、オスはオスどうしで集まる傾向もあるとか。普段はバラバラでも、寝る時くらいは集まって危険を察知しやすくして、よりよい場所を確保することで安眠を勝ち取るということでしょうか。ハチだって、ぐっすり眠りたいのでしょね。

